

山上憶良の「子等を思ふ歌」

—その語法上の問題についての考察—

水 島 義 治

I

思_ニ子等_一歌一首并序

瓜食_ハめば 子_トも思_フほゆ 栗食_ハめば まして憊_シほゆ

何_レ処_ヨり 来_リしものそ 眼_マ交_カひに もとな懸_レりて

安_キ眠_イし寝_ナさぬ (卷五_一八〇_二)

反 歌

銀_シも 金_カも玉_タも 何_セむに 勝_マれる室_シ 子_ニ及_ブ

かめやも (八〇三)

筑前守山上憶良が大宰帥大伴旅人に、悼亡詩文と「日本挽歌」を献呈したのは神龜五年(七二八)七月廿一日であるが、この日憶良は嘉摩郡(現在の福岡県嘉穂郡の東南部)に於て(1)「令_レ反_ニ或情_一歌一首并序」(卷五、八〇〇~八

〇一)(2)「思_ニ子等_一歌一首并序」(同八〇二~八〇三)(3)「哀世間難_ク住_ル歌一首并序」(同、八〇四~八〇五)の三編を撰定していることが「神龜五年七月二十一日於_ニ嘉摩郡_一撰定」とある(3)の後注によってわかる。「郡」とあるのは郡家の意であり、「撰定」とあるのは、単なる個人の述懐ではなくて「敦諭_ニ五教_一、勸_ニ務農功_一、云々」とある、戸令の国守巡行条の精神に則った、国守としての公的・鑑戒的なものであることを示しているものであることは『万葉集私注』に言う通りである。

「思_ニ子等_一歌一首并序」はこの所謂嘉摩三部作の第二篇で、人の子の親の愚かしいまでの愛情を見事に表白した秀作として広く人口に膾炙しているものであることは言うまでもない。

初句の「宇利波_。米婆」の「波_。」が『西本願寺本』『大

矢本』『京都大学本』『神宮文庫本』などに「婆」とあり、二句「意母保由」の「母」が『細井本』『無訓本』に存しないというような諸本による文字の異同、あるいは末尾の「奈佐農」を『細井本』がナサノ（但し「農」の左に「ヌ」あり）とするなど訓の異同も長歌・短歌のいずれにも若干存するが、一首の意味にかかわるものはない。又「眼交」の如く、集中一例のみという語も用いられているが所謂難訓・難語なるものは存しなく、一首の意味も略明らかである。然し長歌の「何処より来りしものぞ」は、古く『代匠記』（初稿本）に「これに二つの心あるへし、一には、いかなる過去の宿縁にて、わが子と生まれこしものといふ心なり。二には筑紫にて、都に留めをける子ともを、瓜をはみ栗をはむにも、さらぬ時もおもかけにみゆるといへり」（遠く都に、残して別れて来ているわが子がどのようにして今わが眼前にあるのか）とある如く、両様に解せられるし、又実際に両様に解せられて来たものであって、宿縁説・面影説のいずれをとるべきか、決定し難い。又やや細かに見て行くと（イ）長歌の末句「安眠し寝さぬ」の「寝さぬ」の構成、「寝さ」の語義や「ぬ」の活用形（普通連体形とするが終止形ではないのか）、（ロ）反歌の文法的構造——第三句「何せむに」を述語であるとして、ここで文が終止すると見るか、あるいは副詞

句として下に続くものと見るか——についての問題が存するのである。これらは主に語法の問題であるが、一首の意味にもかかわるものであることは言うまでもない。本稿は右のような憶良の「子等を思ふ歌」に於ける語法上問題とすべき点についての考察を主として、打消「ぬ」の終止形の存在を確認することと、「何せむに」が述語としてここで切れること、従って「に」は終助詞とすべきことなどを立証しようとするものである。

II

「安眠し寝さぬ」は（イ）「安眠をさせない」ととるほかはないと思うが、（ロ）「安眠をしない」（子どもが安らかに眠らないの義）、（ハ）「安眠をなさらない」（自身の安眠のできないのを、子が安眠しない為だとし、子を主に立てて尊んで言う上に、敬語までも用いているのである） という解もある。（イ）とするのが普通で、「寝さ」を下二段活用。「寝」（自動詞）に対応する他動詞「寝す」（四段活用）の未然形と解するものである。「明く」↓「明かす」「君が目に恋ひや明かさむ長き此の夜を」「一三—三二四八」、「荒る」↓「荒す」「佐保路をば荒しやしてむ」「二〇—四四七七」、「暮る」↓「暮す」「ひとり見つつや春日暮さむ」「五一—八一八」、或いは「鳴る」↓「鳴す」「時守の打ち鳴す鼓数

み見れば「一一二六四」その他下二段（まれには「鳴る」の如く四段）の自動詞に対して四段活用^{（一）}の他動詞の存在は当然考えられるのである。然し、「寝」の尊敬語としての「寝す」は存在するが（「入り来て奈左ね」一四一三四六七、「吾を待つと奈須らむ妹を」一七一三九七九、「枕とまきて奈世^{（二）}君かも」二二二三三）、他動詞「寝す」は他には例が存しないのである。（四）は『全註釈』の解で、武田祐吉博士は一応「なす」を敬語の「寝す」とし、「子どものことに敬語を使うのは、おかしいようであるが、敬語は慣用上、尊敬の意識なしに使用されるので、ここにも使用されたのであろう。」としながら「しかし考えて見れば、子供の動作に敬語を使うのは、何と云っても変である。それでナサ又は、成サ又で」あるとしているのである。又、（五）は『窪田評釈』の解で、あくまでも「寝す」を寝るの敬語と見てのものである。先に引用した「自分の安眠できないものを云々」のすぐ前に「この歌の後半など、愛^{いと}みというよりもむしろ情痴ともいふべきもので」とあって、「寝す」が「寝」の尊敬語であり、我が子に対して敬語を用いることの不自然さを「情痴」という言葉でカムフラージュしているような感じがするが、やはり『全註釈』が捨てたように「安眠」する動作の主体をまぼろしの子供自身の動作と見るのは

不自然である。これは『全註釈』の如く「成さぬ」と解する場合も同じであって、安眠しないのは子供ではなくて、自分自身でなければならぬところであると思うのである。

『略解』には「安く寝る事をせぬ也」とある。これは「なさぬ」を「為さぬ」と見ているものであるが、共に他動詞である「成す」又は「為す」には「する」「行なう」の意味があり、これは自分についても他人についても言える事である。だからこの歌の場合、安眠しないのは子供ではなく、自分であると考えることもできるわけである。然し我が子の姿がやたらに目の前にちらついてそのため「私は安眠^{（三）}することができない」というのならわかるがそのために「私は安眠しない」というのはおかしい。

「安眠しなさぬ」の「なす」の未然形が「寝」の尊敬語「寝す」とは解し難く、「為す」「成す」とも、とり難いとすれば「寝」の使役形と解せざるを得ないし、寧ろ積極的にそう見るべきである。我が子の面影が目先にちらついて（それが）自分を安眠せしめないのである。「寝」（自動詞）の他動詞形、或いは「寝」に対する他動詞と言ってもよいが（確かに一語とすれば他動詞になるのだから）もっと明確に「寝」の使役形又は使役動詞

と言いたいのである。最も単純・明確には『佐佐木評釈』にある如く

「寝は眠さずとも」(二五五六)「吾をまつと寝すらむ妹を」(三九七八)等の例が「寝」に敬語の助動詞「す」をそへた同様に「寝」に使役の助動詞「す」をそへたものと思われる。子どもが安らかに寝させない意。

と考えたいが下二段活用「寝」の未然形「ぬ」が下接の「す」——吉田金彦氏の第一類の助動詞即ち上の動詞をサ行に再活用させた接尾語的な助動詞——と合体することによって「な」と音韻変化を起している以上「寝＋す」と二語に分け、尊敬又は使役の助動詞を析出することはできない。

下二段に活用し、使役・尊敬の意味の助動詞「す」は四段・ナ変・ラ変に、又「さす」はその他の動詞の未然形に接続するがこれらは奈良時代には用いられない。又四段に活用し尊敬の意を示す「す」は、四段とサ変にのみ接続し奈良時代に限って用いられたとするのは、巨視的にはそうであるが微視的には、上代には使役他動の意を表わし、然も四段に活用する「す」がある一方、尊敬の「す」は完了の助動詞「リ」を下接する場合に限り連用形だけではあるが「せ」という下二段型の活用形も存するので

ある(「聞きつやと妹が問はせる雁が音は」八一一五六三その他二五例ほど)。従って活用形や接続から言えば『佐佐木評釈』のように「寝」と「す」に分けることができるし、吉田金彦氏も『上代語助動詞の史的研究』に於てそのように扱って居られるのである。然し「寝」の未然形は「ぬ」であるから「な(寝)す」は一語——他動詞サ行四段「寝さ」はその未然形——と処理するほかはない。国語の単語を①単純語②単一語③分出語④派(由)生語⑤複合語⑥合成語(イ)熟語(ロ)疊語(ハ)合体語と分類した場合、②の分出語に属するもの、細かに言えば動詞語基に使役的・他動的意味を加える接尾語「ス」が接続した派生動詞と考えられるものである。

III

ところで「寝さ」の下の「ぬ」であるが、例えば『全集本』には「又は打消の助動詞ズ」の連体形。ソの結び。」とある。「何処より来りしものそ」で切れずに下に続くものと見たわけであるが、ほんとうはここで切れているのであって、「そ」が係助詞でないことは『澤瀉注釈』の指摘する通りであり、『全註釈』『私注』『全釈』等も明らかにそのように解している。勿論係助詞を上にとらない連体形終止は存する。「我が背子を大和へ遣るとき

夜更けて 曉露あかまつゆに我が立ち濡れし」(二二一〇五大伯皇女)、「大船の津守の占に告らむとはまさしに知りて我が二人寝し」(二二一〇九大津皇子)、「荒し男のい小箭こや手挟み向ひ立ちかなる間しづみ出でてと吾が来る」(二二一四四三〇昔人防人)などがそうである。余情・詠嘆の意を込めて結ぶ場合であるが、「安寝しなさぬ」の「ぬ」もこの下に「コトヨ」などの語を省いた余情を込めて詠嘆する手法として、これを連体形と認めることもできるし、事実そのように解しての口訳も少くない。

このことは又、一般の文語文法書が打消の助動詞「ず」の活用(表)を「ず」「ず」「ず」「ず」「ず」「ず」のように、終止形「ぬ」の例がないものとしていることも関連する。尤もこの活用(表)は平安時代を中心としたものであって、上代には「ナク(ニ)」の形で未然形「な」があり(アク説によればこの未然形「な」は存在しないことになる。これについては後にふれる)、「知ラニ」あるいは「カテニ」「カテ」は可能の意の補助動詞「カツ」の未然形)の形で連用形「に」が存したことは明らかであって、当然終止形として「ぬ」があったと考えられるのであるが、その確実な例を挙げ得なかつたのである。

松尾捨治郎博士の『万葉集語法研究助動詞篇』(昭和二一年成稿、昭和五三年七月出版)、岩井良雄氏の『日本語法史

奈良・平安時代編』、此島正午博士の『国語助動詞の研究体系と歴史』、又湯沢幸吉郎博士の『文語文法精説』に於ても終止形「ぬ」については何らふれていないのである。これは古語辞典類も同じで、『岩波古語辞典』は「基本助動詞解説」では「ず・ず・ぬ・ぬ」と活用、連用形に「に」があり、「に・ぬ・ぬ」の系列が古いと説明しているが「基本助動詞活用表」には「○ずずぬね○」とあって終止形「ぬ」を示さず、『角川古語辞典』は未然形・連用形の「な」「に」は「(な)」「(に)」として挙げてあるが終止形は「ず」だけである。『明解古語辞典』は、終止形に「ぬ」は挙げているが、用いられた時代は3~4即ち鎌倉時代から江戸時代後期までとし、上代・平安時代に用いられていないことになっているのである。又『万葉集事典』は巻頭の「万葉語活用表」の助動詞の活用の中には終止形の欄に片仮名で「ヌ」とあるが(片仮名は仮名でなく読まれる例であることを示す)、本文中の説明は連体形「ぬ」についてのみである。『時代別国語大辞典上代編』は巻頭の「上代語概説」の中の助動詞表にはやはり終止形の欄に「ぬ」を挙げているが、「上代語においても既に終止形又はほとんど用いられず」と述べているのである。

山田孝雄博士の『奈良朝文法史』は「打消をあらはす

「復語尾」に於て、「ず」については未然、連用、終止としての三つの用法を認め、「ね」については「已然形としての用例を完全に示せり」とし、「ぬ」については「連体形として、体言に冠して之を装定するもの」「終止となれるもの」、「連体形に接すべき助詞に伴へるもの」としてそれだけの例を挙げてはいるが、「終止となれるもの」として挙げてはいる例は次の四首である（同書二六七頁）。

那爾騰柯母干都俱之伊倍騰安我多米波照哉多麻波奴

（紀、二十五）

日月波安可之等伊倍騰安我多米波照哉多麻波奴

（萬五）八九二

明日香川明日谷將見等念八方吾王御名忘世奴

（萬二）一九八

伊豆久欲利积多利斯物能曾麻奈迦比爾母等奈可利提夜

周伊斯奈佐農

（萬五）八〇二

右の四例のうち第三例までは「柯母」「哉」「八方」の結びとして連体形と認めるべきである。第四例は上に係助詞の指示がないので、或いは終止形と認めてのものとも思われるが明確ではない。

「安眠し寝さぬ」の「ぬ」を「あるいは終止形であるうか」とされたのは佐竹昭広氏であり、大野晋博士の所謂アク説は成立しないという立場に立つ吉田金彦氏はこの「ぬ」が終止形であることは異論がないとし、更に次の二例を加えた。

④ 白玉の五百つ集ひを解きも見ず、吾は離れかてぬ
（奴）。逢はむ日待つに。（一〇一—二〇二）

⑤ 上つ毛野伊香保の嶺ろに降る雪の、行き過ぎかてぬ
（奴）。妹が家の辺り。（一四—三四—三三）

④の「吾は離れかてぬ」は原文が「吾者干可太奴」とあるもので、「ワレハホシガタヌ」（『新校』）、「ワレハカレカダヌ」（『全註釈』）、「ワレハアリカテヌ」（『澤瀉注釈』）、「アハホシカテヌ」（『大系本』）などと訓まれているものである。「干」は「年」の誤りと見て「寝かてぬ」とすれば意味がよく通ずるので、『増本』『桜楓本』に従うべきであろう。「可太奴」は「カテヌ」（「太」は濁音「ダ」の仮名として用いられるのが一般であるが、清音「テ」の仮名としても用いられる。「五十殿寸太」（一一—二九〇三）の例もある）で、「カテ」は可能を表わす下二段動詞「カツ」の未然形。「ヌ」は打消の助動詞の終止形であることは動かないと思われる。これについては既に『窪田評釈』が打消の助動詞の終止形の古格として居り、『全註釈』も「ヌ

は、古くは終止形も又であったと見られ、こゝはその終止形である織女の言なので、古風な語法を使ったのだらう」と言っているし、『澤瀉注釈』も亦、「上に『吾は』とあるから連体形で結ぶことが許されない」という理由から、『全註釈』が「ヌ」を終止形と見たことは正しいとしているのである。別に打消の助動詞の終止形であるとは言っていないが、「ホシカテヌ」「ホシカタヌ」「ネカテヌ」「アリカテヌ」のいずれにせよ「干しかねることである」(『佐佐木評釈』)「乾すことができない」(『大系本』)「干シカネテキル」(『全釈』)など口訳はいずれも「ヌ」を終止形としてのものである。以上のように確実に打消の助動詞の終止形と認められるこの歌(④)の「ヌ」の、然も仮名書きの例の存在にもかかわらず、多くの文法書や古語辞典が終止形「ヌ」を挙げず、『万葉集事典』が仮名書の例なしとしているのは不思議なことであると云わねばならない。

次に⑤の東歌の例は如何。原文は「遊吉須宣可提奴」とあるものであるが、すぐ下に名詞「家」が接しているので、『大系本』は「このまま通り過ぎることのできな

い妹の家のあたりよ。」「澤瀉注釈』は「行きすぎかねる妹の家のあたりよ。」と「ヌ」を連体形として下の名詞に続くものをしており、『私注』などは「ガテヌは出来

る意の下二段の助動詞カツに否定の助動詞ズの連体形ヌが附いたと説明されるものであろう。ヌを終止として、四句切の歌と見るべきではあるまい。」と言っているのである。これに対して『全註釈』は「ヌの形で終止形を採るものと考えられる」として「行き過ぎることができない。あの子の家のあたりは。」と口訳して居り、『論究』『窪田評釈』『東歌疏』などもそのように解している。

この歌は末尾に「の」をとる上三句「上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の」は類音「行き」を導く序詞であって、「――に降る雪のように」「――に降る雪ではないが」と解すべきであって、一首の本義は「恋しい妹の家の辺りは通り過ぎ難いことだ」と言うのである。これを第四句と五句とを倒置した形にしたのは、被序語「行き」を序詞に近づけるという意識によるものであろうが、句を倒置せしめるというのは強調表現の手法の一つであるから、句の位置に即して下二句を口訳すれば「通り過ぎ難いことだ。妹の家の辺りは。」となつて、『全註釈』『窪田評釈』『東歌疏』『論究』など又吉田氏の如く、ここで終止すると見るべきである。但し、ここで終止するとしても「ぬ」が終止形であるとはきまらない。「吾は離れかてぬ」の如く、上に「は」をとれば確実に「ぬ」は終止形であるが「吾は」とあって連体形で結ぶことはないから

この場合は上に「は」がないのである。吉田氏も上三句が序詞であることを押え、「行き過ぎかてぬ」(事よ)の略とも見られるとするが

これはいわゆる「(主格)の……(述語ぬ(連体形(ことよ)の形式ではないことは明らかなので、やはり終止形「ぬ」であつてよい(山本正『東北大学教養部文科紀要』九号四八頁論文)。

とされているのである。主語「の」、或いは疑問語や「か」「かも」「や」「ぞ」「なむ」など疑問又は強意の係助詞が上にならないから当然「ぬ」は終止形と考えていいわけであるが、一方「ぬ」は連体形としての用法が多く、『私注』のように「又を終止として、四句切の歌と見るべきではあるまい」という見解も当然成り立つわけである。

第一終止法、即ち終止形による終止として確実な例は確かに少ない。辛うじて「安眠し寝さぬ」と「吾は離れかてぬ」の二例である。これに対して確実に連体形と認められる「ぬ」は連体詞法即ち連体修飾法の「ぬ」の多いことは勿論のこと所謂第二終止法_{II}連体形終止法も『万葉集』には三〇例ぐらい存するから、この東歌の「行き過ぎかてぬ」の「ぬ」を終止形と見るか連体形と見るかは、形の上からは決定することが困難である。主格「の」或いは疑問詞や「ぞ」「なむ」「や」「か」など疑問

・強意の係助詞結びでないから終止形であると言いつけるかどうか。更に「行き過ぎかてぬ」が倒置されたもので、「ぬ」が文の終止に用いられたものであるとしても、活用形が終止法であると決める事はできないのである。然し確実なものが僅か二例であるとしても終止形「ぬ」は存在しているのだから「行き過ぎかてぬ」の「ぬ」を終止形と認めてよいのではないか。猶、吉田氏は

霹靂ひかりの日香空ひかの九月の時雨の降れば雁がねも未来鳴
神奈備の……(一三—三三—三三)

の「未来鳴」は「いまだ来鳴かず」「いまだ来鳴かぬ」の両様に訓める。若し後者の訓を採るとすれば終止形「ぬ」の例となるとされている。然しこれは『大系本』『私注』『澤瀉注釈』『桜楓本』等が「イマダキナカネ」と已然形に訓んでいるに従うべく、従って終止形「ぬ」の例とは認め難い。

終止形「ぬ」は僅か三例、連体形「ぬ」、已然形「ね」は健在でも、未然形「な」、連用形「に」は「なく」「なくに」、「鮑かに」「知らに」と化石的な姿をとどめていることを見れば、古く「な・ぬ・ね・ね・〇」と活用したものが見られる打消の助動詞「ぬ」は、同じく否定的判断を示す語であるとしても「決定的打消」と言われる「ず」に勢力を奪われ、上代に於て既に「過去の

人」であったのである。然も未然形「な」の存在すら危いのである。

所謂ク語法と関連する大野晋博士の阿克説によれば「有らなく」「思はなく」の「なく」は $nu+aku \rightarrow naku$ → $naku$ であるから「な」は当然打消の助動詞「ず」の未然形とすることはできないことになる。

連用形が「に」、連体形が「ぬ」、已然形「ね」、そして折角終止形「ぬ」の存在を確かめ得たのであるが、未然形「な」の存在が確認できないとすれば甚だ厄介なこととなる。勿論「な」の存在が確認できなくても「に・ぬ・ね」の形から四段式活用であるとは言えるが、こゝでほんとうに未然形「な」が存在しないのかどうか、即ち阿克説の検討と必要に迫られるわけである。阿克説を否定若しくは克服しない限り未然形「な」の存在が認められないからである。

「言はく」「散らまく」「告げらく」「良けく」「惜しけく」に於ける「く」の如く四段・ラ変動詞の未然形、形容詞の「ーケ」「ーシケ」の形（やはり未然形）及び助動詞「リ」の未然形、「ズ」「ム」「ケム」「ケリ」の古形未然形「ナ」「マ」「ケマ」「ケラ」と「キ」の連体形に付く「く」「見らく」「恋ふらく」「老ゆらく」の「らく」如く、上一段の未然形と、上二・下二・カ変・サ変

及び助動詞「シム」「ユ」「ツ」「ヌ」などの終止形につく「らく」は、それぞれ「ーするコト」「ーするトコロ」と上接の活用語に体言としての資格を与えるもので、最も普通には活用語を体言化する接尾語とされているものであるが、語法的処理としては準体助詞とするのが最も穏当であると考えるものである。このような所謂ク語法は、語原的に活用語の連体形に「事」「所」を意味する古い形式名詞「阿克」が付いて音韻変化をした形の末尾の音節であると言う大野晋博士の阿克説は、(1)母音の連続忌避—狭母韻脱落($ru+ave$) (2)母音融合($i+ave$)という上代音韻上の特質に基づく原則の応用と、「事」「所」の意の「阿克」の存在を予想することによって「動詞「あくがる」は阿克(名詞・所・事)十かる(難)(「く」「らく」の区別も動詞・形容詞・助動詞の区別もなく、あらゆるク語法が唯一の例外を除いて全部一貫した原理できれいに説明できることになったのである。即ち「有らく」はラ変の未然形に「ク」が接したのでなく連体形に「阿克」がついて $aru+aku \rightarrow aruaku \rightarrow araku$ と前の狭い母音/ɔ/が脱落した結果成立したものであり、上一段の「見らく」は $miru+aku \rightarrow miruaku \rightarrow miraku$ 又「寒けく」は $samuki+aku \rightarrow samukiaku \rightarrow samukeku$ と説明できるのである。

一つの例外というのは過去の助動詞「き」の連体形「し」にアクが接続した場合、 $si + aku \rightarrow siaku \rightarrow seku$ 即ち「せく」という形になるべきなのに、実際には「しく」という形になっている。この場合は「アク」でなく「何処」の「ク」(意味はやはり所・事)がついたとするのである。なぜかというところ「し」の母音の性質が $\langle \text{sh} \rangle$ が続かないイ列乙類の母音 $\langle \text{sh} \rangle$ であったからであろうというのである。

このアク説に対しては北条忠雄・宮田和一郎・井上章其の他の諸氏の批判のあることは周知の通りであるが、吉田金彦氏も亦(1)「あくがる」は「足離る」であって「所(事)離る」ではない。従って最も根本的なところでアク説はくずれぬ。(2)「アク」できれいに説明がつくといいながら一つの例外を認める事は不都合である。「しく」が「せく」にならない理由は「し」が乙類の母音だったからだとするが「し」に甲乙を認めるか否かには議論がありその一方にのみよって説くのは如何と思われる。(3)各活用語成立の順序とか、性格や類用の差のある活用あるいは活用の種類の分化・発達と活用の段の成立につき三つ以上の関連等に対する考慮が何らなされていない。とい点からアク説に反対されているのである。確かに、アクが事・所の意ではなく足又は踵の意であるならば(「足が離

れる」「踵が地から離れる」、それから心が浮き立つという意に変じた)「言はく」「悲しけく」などの「く」にこれを適用することはできないから、この点で先ずアク説は崩れることになる。然し反対説にも批判の余地があり、単に音韻論上のみならず、語法的にもアク説がより合理的な面があると思われるので、直ちにアク説を否定することはできないのではないか。打消の助動詞「ぬ」の未然形に關して——確かに「なく」は $nu + aku \rightarrow nuaku \rightarrow naku$ とアク説で説明できる——連用形に「に」、終止形・連体形に「ぬ」、已然形に「ね」があり、当然未然形に「な」が考えられるのにそれが存しないとする事が納得できないのである。猶今後の研究に俟たなければならぬが従来の説に従い、未然形「な」を認めて置きたい。従って「なく」の構成は「な+く」で、「な」は打消の助動詞「ぬ」の未然形、終止形「ぬ」が確認される以前は、打消の助動詞「ず」の古形未然形と謂われたものであり、「く」は準体助動詞であるとするものである。

IV

さてここで再び「安眠し寝さぬ」にかえるが「安眠し」の「し」は強めの助詞——助詞の分類としては副助詞とするのが普通であり、それが妥当であると思うのだが

係助詞又は間投助詞とする見解もある。——であることには問題はない。然し同じく強意と言っても係助詞「そ」(ぞ)「なむ」「こそ」或いは「は」などとう違うのか。こういう点については従来あまりふれられていなかったが、大野晋博士は「し」は、「ハ」のような確信をもって他を排除するような強めでも、「ゾ」のような人に教示する断呼たる強めでもない。又「コソ」のような強い感情に支配されていることを示す強さでも、「ナム」のような、対人関係を意識し、丁寧に相手に訴えるものでも「モ」のように不安・不確実な気分の中で執着の念を表わすものでもなく、「自分には自然にこう思われて来るのだがとか、自分には自然にこう感じられるのだとかいう控え目な主観性の表明」(註)「話し手が判断をきめつけずに、ゆるくやわらわけて、婉曲に控え目に述べる態度を表明する語」(註)であると考えた。

これは (1) 全体の約五割が「針はあれど妹し無ければ」(二二―二九八二)「事しあらば火にもれにも」(四一五〇六)のように「シ―バ」という呼応の関係を示している。(2) 全体の二割五分が「吾妹子し吾を偲ふらし」(一七―三九五二)「雪の摧けしそこに散りけむ」(二一―一〇四)のように、下に「ム」「ラム」「ラシ」「マシ」「ケム」「ベシ」など推量・勧誘・希望などを表わす助動詞によって結ば

れている。更に全体の二割弱が「家し偲はゆ」(一六一六)「寒き夕は大和し思はゆ」(一六六〇)の如く下が自然可能(自発)の助動詞「ユ」で終っている。「シ」の全用例の九割が以上見た通り、条件句の形成・推量・勧誘・希望の心持の表明及び自発の助動詞「ユ」との呼応に用いられているという事実を押えての見解であるが、大野博士は以上全体の九割余を占めるもの他は、(4)「そこし恨めし秋山われは」(二一―一六)、「言問はましを今し悔しも」(二二―一三四三)のように心情を表現する形容詞で終るものが大部分で、僅かではあるが「茜さす君がころし忘れかねつも」(一六―三八五七)、「橘の珠貫く月え来鳴きとよむる」(一七―三九二二)のような例のあることを示し、「心し忘れかねつも」は結局は心情表現である。然し「橘の珠貫く」(保登等勢須奈余乃情曾多知花乃多麻妓久月)来鳴登餘牟流)の結びの文節が「とよむる」で心情表現でないから「月之」であれば「シ」一般の例に合わない。それで「之」とある「西本願寺本」「紀州本」その他の本文は誤りであろうとし、『大系本』は意によって「之」を「余」に改め、「月に」と訓んでいるのである(『澤瀉注釈』には「類に『等』とあるのは『尔』の誤としてツキニに訓めば、よくわかるが、「月之」とあるにより、強意の助動詞『し』を加へたと見る事が出来るからしひて誤字説

をとるには及ばないであらう。」とある。大野博士は一般とは多少異っているものとして大伴坂上郎女の

ぬばたまの夜昼といはず思ふにしわが身は瘦せぬ嘆
くにし袖さへ濡れぬ 四一七二三

を挙げ「こういう例は他にほとんどない。」と言われ、大伴家持のやはり「シ」の用法としては例外的な「い漕ぎつつ国見しせして」(一九一四二五四)を挙げ「これには何か理由があるかと思うが、明らかでない。」とされているのである。

ではいったい「安眠し寝さぬ」はどうなのであろうか。大野博士が「し」の用いられ方として挙げた(1)~(4)のいずれでもないことは確かであり、心情表現の形容詞で終っていないという点で(4)からはみ出ることになるが、心情表現であるという点に於て、例外的なものとならない僅かなもの一つでもないのである。即ち「し」の用法としては坂上郎女の歌と同じように例外的なのであり、「こういう例は他にほとんどない」、そのほとんどない例ということになるのである。問題は例外といわれる「し」の意味である。これについては大野博士は何もふれられていないが、おそらく控え目な主観性の表明という一般の用法に於けるものと変らないであらう。ただ問題はこの係助詞「ぞ」「は」「こそ」「なむ」など

と異った強意をどう口語に移すかということである。

「安眠し寝さぬ」を『大系本』は「私に安眠もさせないことよ」と口訳し、『澤瀉注釈』も「安眠をさせないことよ」としている。単に「私を安眠させない」では折角の強意の助詞「し」が生かされていないことになる。

『大系本』が「——も——ことよ」としたのは「し」を生かし切った限界と見るべきか。「安らかに眠ることさへさせない」(久松潜一『万葉秀歌』(三))「夜も安らかに眠らせてくれないことだ」(次田真幸『万葉集講説』)それぞれに苦心しているのであろうが、「ぞ」「なむ」「こそ」など微妙に異なっているであろう。「し」の表わす強意を表現することは無理のようである。

憶良が接続の上で殆ど変っていない、同じく一首節の強意の助詞「ぞ」を用いて「安眠ぞ寝さぬ」と言わずに「安眠し寝さぬ」としたのは何故なのであろうか。おそらく同じ強意でも「ぞ」と「し」の微妙な違いを意識してのことではなかったに違いないと思うが、これは語法の問題ではなく、語法などの立ち入ることのできない表現主体に於ける秘奥にして微妙な世界に属することなのであろう。

猶「安眠し寝さぬ」という表現は、憶良のこの歌の他にはないが、「安眠も寝ずて」(一五三三六三)「安眠も寝ず

に」(二二―三二五七)、「安眠寝しめず」(一九一四―一七七)「安眠な寝しめ」(一九一四―一七九)等があり、「眠は寝さずとも」(一一―二五五〇)ともある。「安眠」と「寝さ」又は「寝しめ」と何か重複しているように感じられるが「哭なく」「哭し泣く」「哭のみ泣く」などという言い方もあるを見れば慣用句的なものであったと考えられる。

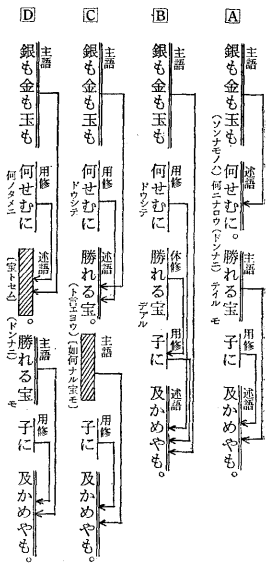
V

反歌の文論的構造は次のように考えることができよう。Bが一首一文であるのに対してA C Dは一首二文即ち二文構成であるが、Cに於ては後文の主語(銀も金も玉も)如何なる宝も) Dに於ては前文の述語(宝とせむ)が省略されていると見られるものである。Cは『全集本』の解であるが、主語「銀も金も玉も」に対する述語が二つに分けられているとするものである。

「何せむ」は「何になろう。なんにもならない。」「何の役に立とう。」「に」は詠嘆の終助詞。従って二句で切れると見る。これがAである。これに対して「に」を原因を表わす格助詞(ノタメニ)と見るのがDである。

終助詞「に」は例えば

久方の天路は遠しなほなほに家に帰^かりて業^{わざ}をしまさ
に (五一八〇一)



の「に」の如く、動詞の未然形について相手に対して詠え望む意を表わす「ね」と同じ用法のものもあるが、「何せむに」の「に」は詠嘆の意のもので、やはり憶良の

世の人の 貴み願ふ 七種の 宝も我は 何為むに
我が中の 生れ出でたる…… (五一九〇四)

の「に」と同じである。この「恋男子名古日歌」の「何為むに」は下の「我が中の」には続かず、ここで切れるものであることは明らかであるが、原文「我波何為」を『大系本』『全註釈』は「ワレハナニセム」と訓んでいるのである。尤も「何為」を「ナニセム」と五音句とするのは「に」を読み添えたわけであって、『大系本』『全註釈』は「七種の／宝も／われは何為む」と五四七

に訓んでいるので当然「ニ」を訓み添えていないわけである。「七種の／宝も我は／何せむに」と五七五と訓んでも、いずれにしても次句との関係から見て「何為」で切れるとすべきである。

『澤瀉注釈』『佐佐木評釈』『私注』は勿論、最も新しい中西進博士の注釈に於ても「何為」は「ニ」と読み添えて居り卷十一―二三七七・二三七八の「何為」など明らかに「ニ」を訓み添えなければならぬ例も存するのである。

「銀も金も玉も」の歌では「奈余世武余」と仮名表記であるから訓には問題ないが、『全集本』の如く反語と呼応する副詞とする説をとらないのは、この九〇四の歌に於けると同様、明らかに「何為むに」で文を閉じていると認められる例が存するからである。

『澤瀉注釈』もこゝで切れるを見て、単に「何せむ」とあるのと同様「何になろう」、「に」は詠嘆の意を表わすと解しているが、『大系本』は『全集本』と同じく陳述の副詞とし「金銀も玉も何で子というすぐれた宝に及ぼうか」と口訳している。これはイ「何せむ」という場合は「何にしよう」「何になろう」という意味でそこで切れるが、〔ロ〕「何せむに」「に」が下に加わった場合は、「どうして」「何のために」という意で下にかかっていく

所謂陳述の副詞と考えるからである。

〔イ〕恋ひ死なむ後は何せむ〔何為〕。我が命生ける日にこそ見まく欲りすれ (一一―二五九二)

玉敷ける家も何せむ〔何將為〕。八重覆へる小屋も妹と居りてば (一一―二八二五)

〔ロ〕恋ひ死なむそこも同じそ。何せむに〔奈何為二〕人目他言痛み吾がせむ (四一―七四八)

何せむに〔何為〕命継ぎけむ。吾妹子に恋ひざる先に死なましものを (一一―三三七七)

右の例で明らかのように、確かに「世の人の貴び願ふ七種の 宝もわは 何為」を除いて（先にふれたようにこれはナニセムニと訓むべきである。『大系本』にナニセムとして勿論〔イ〕に入れている）、文頭（時に文中）には「何せむに」が来て、「どうして」「何のために」の意の陳述の副詞となる場合が多い。逆に文末には「何せむ」とあって、「何にしよう」「何になろう」という意味で切れる場合が多い。従って「子等を思ふ歌」の「奈余世武余」はまごうことなくナニセムニであり、然も文中にあるから副詞として下にかかるのと解すべきものとなるのであるが、一首の声調から言えば「ナニセムニ」とあってもここで切れると解し「何になろう」の意とするのが自然ではないだろうか。「ナニセム」は「ナニカセム」の語勢であ

る。然もここで切れるとした場合下の「に」を終助詞と見る事ができるのである。絶対に「に」を詠嘆の終助詞と認められないというのなら別であるが、そうではないと考えるのである。

この「何せむに」の「に」を、「ク語法十二」という形の「なくに」の「に」と同じものと考えられるかどうか。「なくに」は文中・文末のものを併せて『万葉集』に一四八例数えられるが、アク説肯定の立場の木下正俊氏はこの「に」を「感動詠嘆の助詞だ」という説はいかにも奇妙である^(注7)と言われ、アク説否定の吉田金彦氏は「氏は「な」は打消「ぬ」の未然形「く」は「事」の意の不完全名詞とする」^(注8)「指定の助動詞の中止法」^(注9)「そこで表現が中断されて強い曲調感が余情として残る」^(注10)をさわる。文中用法のものは勿論、文末用法のものも逆接或は順接を示すもので、文末のものには、このほかに逆接順接のいずれをもつかないものが存することに確かであるが、此島正年氏は「氏ははじめ詠嘆の終助詞ないし間投助詞と考えてきたが、断定の助動詞の連用形に改められた」この「に」の接続性は「断定辞連用形の機能」^(注11)であると考えられているのである。いずれにせよ木下・吉田・此島の三氏は「に」を終助詞としないのである。

これに対して「何せむに」の「に」は、ここで文が切れ、

この句が叙述句であるとする限りは詠嘆の終助詞とするよりほかはないのである。『全註釈』は「何にかせむの意。下のニは感動の助詞。句切」と注し、『澤瀉注釈』は「常にあらむと吾が思はなくに」(三・二四二)の下の「に」と似た使ひ方で詠嘆の意であり、ここで切れる。」としているのである。因みに二四二の歌の結句は『澤瀉注釈』は「自分は思はないことよ。」であり、『全註釈』は「わたしは思わないことだ。」である。然し「何せむに」の「に」には接続の意味は全くないし、断定の助動詞の連用形とも考えられない点で「なくに」の「に」とは異なるものとしなければならぬ、とすれば、若しこの憶良の歌の「何せむに」の「に」を詠嘆の終助詞とすると、その用例は『万葉集』中この一例となるのである。

「何せむに」を一般の用例に従わずに叙述句、然もここで切れるとする時、右のような無理が生ずるのである。然し猶「何せむ」の詠嘆的若しくは強調的表現と見たいのであるが、それは許されないことであろうか。言語は表現主体を離れた瞬間パロールとしての生命を永遠に終える。我々の眼前にあるものはラングであり、それに如何としてもパロールにもどす術なきものである。従って我々受容主体は、語義・語法にわたって、常に用例により、帰納的に考えて正しく意味を把握するほかないわ

けである。解釈とはラングをよりパロールに近づけることであろうが、そのためには先ずラングをラングとして正しく把握することに努めなければ、主観に流れ、恣意に陥った結果を招くことは必至である。語義・語法を無視した誤った解釈をまま見ることがある。よくとれば所詮不可能とは知りながら猶も表現主体がこの言葉に託し、その表現に込めた心情をなんとか垣間見ようとつとめた結果かも知れないが、解釈に於ける恣意は決して許されない筈である。

憶良の「銀も金も」の歌に於ける「何せむに」を副詞句として下に続くものとしても、ここで切れる強調的叙述句としても別に誤でなくさして大きい違いはない。ただ前者とするよりも後者と解した方が憶良の心情により近いのではないかと考えるだけのことである。ここでは解釈に於ける主観の許容量が問題となる。然しこれは語法の領域を超えるものであろう。

〔A〕〔B〕のうち〔B〕は『大系本』、〔C〕は『全集本』、又尾崎暢殃・桜井満博士、然して〔D〕は『新考』の見解である。諸注多くは〔A〕と解している。私も〔A〕と解するものであるが、正直に言えば「に」を詠嘆の終助詞とすることが不安である。猶後考に俟つとすべしか。

注1 佐竹昭広「上代の文法」『日本文法講座3 文法史』

(明治書院 昭三一・一二) 六八頁

2 吉田金彦『上代語助動詞の史的研究』(明治書院 昭四八・三) 二六四頁

3 同右 二六五頁

4 同右 四八三・四八四頁

5 高木市之助・五味智英『日本古典文学大系万葉集』四(岩波書店 昭三七・五) 五〇三頁

6 大野晋・佐竹昭広『岩波古語辞典』(岩波書店 昭四九・前田金五郎 一二) 四五〇頁

7 木下正俊『「なくに」覚書』『万葉集研究』第一集

(『讀書房 昭四七・四』 三六九頁

8 (2)と同書 一一五〇頁

9 此島正平『「なくに」小考』『淺野信博士古稀記念 国語学論叢』

(『桜楓社 昭五二・一〇』 一七五頁

〔桜楓社 昭五二・一〇』 一七五頁